

Case Study 1

● 機能訓練指導員 ●

あん摩マッサージ指圧師

身体のもッサージと心のマッサージ

持ち前の明るさと協調性で、
職場に欠かせない頼もしい存在となり活躍しています。



お年寄りに笑顔を取り戻したい

110床を抱え、地域のコミュニティと交流できる、開かれた特別養護老人ホームを目指す第二光陽苑で機能訓練指導員として働く荒川裕子さん（34歳）は小中高と健常者と同じ学校に通っていました。しかし徐々に視力が低下したため、国立職業リハビリテーションセンターで6カ月の訓練を受け、一度は電話交換手として就職しました。約2年間電話交換手として、やりがいを感じ、張りのある日々を過ごしていましたが、通勤に2時間を要する職場への配置転換を機に、一生の仕事としてあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師になることを選択しました。

3年間国立身体障害者リハビリテーションセンターで学び、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の3つの国家資格を取得して、現在の第二光陽苑に採用されました。「資格取得前から特別養護老人ホームで働くことを希望していました。高校生の時に祖母が亡くなったのですが、小脳疾患でほとんど寝たきりになった祖母に何もしてあげられなかった想いがあります。機能訓練指導員としての仕事を通して、一人でも多くのお年寄りに喜んでいただきたいと思っています。お年寄りの笑顔がみたいです」

他の職員との協調・連携が仕事の要

機能訓練指導員として働き始めて8年目になり、現在は83名の入所者の状態をつぶさに把握している荒川さんですが、当初は「就職したての4月にいきなり満床になって、全員の身体状況の把握や、居室を覚えるのに半年くらいはかかりました」と困難もあった



■プロフィール

荒川 裕子さん (34歳)
(障害等級1級)

あらかわ・ゆうこ 1971年、東京都出身。先天性白内障のために徐々に視力が低下。高校卒業後、電話交換手として就職。その後、特別養護老人ホームへの就職を希望してあん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師の国家資格を取得。趣味は観劇と旅行。

社会福祉法人 泉陽会 第二光陽苑

所在地：東京都練馬区関町北5-7-22



私が私の仕事



同僚からのメッセージ
相談員
遠山 有哉さん

荒川さんは、いつも笑顔
をたやさずお年寄りに接
しています。

ようです。個別にリハビリ計画を立て、目標を設定し、理学療法士や他の職員と話し合いながらケア・プランに繋がります。音声パソコンを使用している個人データや日誌の入力も手慣れたものです。

「仕事上で荒川さんの視覚上の障害を意識することは全くありません。寮母、看護師といった他の職員と情報を交換し、連携しながら仕事をする大切さがわかっているのですね。入所者と1対1で過ごす時間が長いので、他の職員にはわからない情報を伝えてもらうことが多く助けられています」と相談員を務める遠山有哉さんは話しています。

信頼を獲得し、入所者の心をほぐす

荒川さんは自らを「お笑いマッサージ」と呼びます。確かな技術、高い専門性に加え、明るく、素直に人の話に耳を傾ける性格や話題の豊富さで入所者を朗ら

かにし、施設内で絶大な人気を誇っています。週に1、2回のマッサージを心待ちにしている入所者が多いのです。「可動域を広げる訓練、痛みや凝りをほぐすことはもちろん大切な仕事です。それ以上に重要なのが悩みを語ってもらうことでしょう。身体のマッサージに加え、心のマッサージが私の仕事だと自覚しています。理想は『あなたの顔を見たら痛みが直ったわ』って、入所者に言われるくらいの信頼感を獲得すること」と荒川さんは話しています。そして「経験を積み、勉強を続け、少しずつでも進歩していきたい」と、研修や学会を通して自らの専門性を高めることにも余念がありません。

Message



●施設長

高橋 三行(たかはし みゆき)さん

荒川さんを採用するにあたり、視覚障害者であることは全く問題になりませんでした。通勤等の生活訓練は十分に受けていますし、職場での配慮は事務手続き等を読み上げる程度のことです。むしろ自らの障害を乗り越え、

進歩し、変わろうと努力してきた荒川さんのような人にこそ機能訓練指導員の仕事は打ってつけなのです。専門的な知識と技術で入所者の身体機能を維持したり、マッサージで凝りや痛みを緩和することに加え、入所されているお年寄りの悩みや心の痛みに辛抱強く耳を傾け、癒すことが必要なのです。荒川さんには経験、年齢を重ね、よりよい“心のマッサージ”ができるよう期待しています。

